

旧き、よき職人の世界

— 鴨下松五郎氏に聞く —

聞き手：大江源一（広報委員長）



写真：鴨下氏（左）、大江氏

“火消し”の度胸

大江 鴨下さんはお父さんの後を継がれたのですが、お祖父さんという人は何をしていたのですか。

鴨下 鳶、火消しですよ。「に組」の長左衛門という「頭（かしら）」の子分になって梯子持ちになった。江戸の末期です。昔の鳶の「頭」というのは、たいしたもんだったそうですよ。その中でも長左衛門ってえ人は、講談に出てくるような有名な人でした。お祖父さんは度胸が良かった人だと聞いています。

昔の火消しは屋根に上がったら、火が近付いてきた時に屋根の上でどれだけ我慢してられるか…くだらないことで、火消しが屋根に残ったって火が消えるわけじゃない(笑) …なんてことが自慢だったらしい。ある時、屋根にいる祖父さんが危ないからと梯子をかけてくれた。お祖父さんがその梯子を降りる時に、刺子(さしこ)の裾が梯子の頭にひっかかった。そうしたらね、くだらないこと見ている奴がいるんだね、普通は刺子を引っ張るところを、うちの祖父さんは纏を持ったまま梯子を登り返して裾をはずして降りて来た。それだけの度胸がある。そういうことらしい(笑)。

だいたい、鴨下ってのもおかしいんだ。うちの本当の名字は織茂ってんだから。

大江 それがどうして鴨下さんになっちゃったんですか。

鴨下 うちの祖父さんが博打で捕まって(笑)、さすがに親の名前が言えなかった。それで友達の「頭」に鴨

本誌では、2008年の4月号、5月号に故鴨下松五郎氏へのインタビュー「板金いま、むかし」を再録しましたが、今月は2000年1月号に掲載しました「旧き、よき職人の世界」を改めて掲載します。

当時93歳の鴨下さんのお話は、江戸末期からはじまり、明治・大正、そして昭和の職人の世界を紡ぎだします。

「板金いま、むかし」は、協会ホームページでご覧いただけます。

下って人がいて、「鴨下与作」と名乗った。それが自身番に残っちゃった。だからうちの親父が生まれた時は「鴨下」になっちゃった。もともとは刀屋、刀剣商だったそうです。幕府時代だから。

その倅がうちの親父。これもすごかったらしい(笑)。今の暴走族、あれらしい。久松警察で鴨下と聞けば知らない人はいない。それが二十歳の時に病気をして改心したんでしょうね、付き合いのあったブリキ屋…この人もすごいんだ、元お侍…に「いつまでもくだらないことしてんじゃない。ブリキ屋をやれ」と言われて二十歳の時に「小僧」になった。

二十歳にもなって「小僧」をしなきゃいけない。これはこれで大変だったでしょうね。随分細かなことも言われても我慢したらしい。

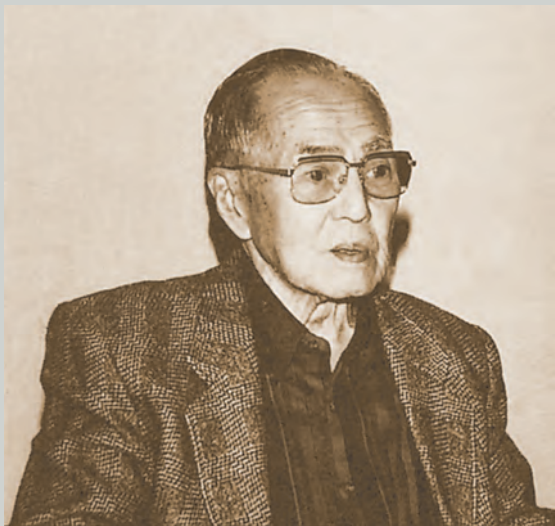
親父の顔を見るまで

大江 前回の時も少しお聞きしましたが、お父さんは大変厳しかった。

鴨下 厳しいなんてもんじゃないありません。母親も苦労しましたよ。何たって威張ってるんだから、どうしようもない(笑)。御飯食べるたってちょっと音立てるでしょ。そしたら皆親父の顔見るんだから。「しっかり持て」とか「静かに食べろ」とか必ず何か言う。

あたしも十四、五まではしょっちゅう張り倒された。二言目には張り倒される(笑)。拳骨(げんこつ)じゃ殴らないんですよ。拳骨で殴ると頭悪くなるって(笑)。平手なら腫れるくらいだからってね。こっちはたまりませんよ。何時も顔腫らしてるんだから。

親父が一所懸命仕事をしているでしょ。子供の頃



鴨下松五郎氏(故人・平成13年4月14日逝去)
1907年(明治40年)生まれ。勲六等単光旭日章、
労働大臣卓越技能章、日本銅センター章などを受章。

は親父の側に立って必要な道具、掴みとか鋏を渡さなきゃいけない。手術の時の看護婦さんのようにね。だけど、そんな訳にいかないよ、十二、三で。だいたい子供だからすぐよそ見するでしょ。それでも「鋏」とか言ってくればまだいいの。あたしが親父の顔見るまでこっち見てんだから(笑)。意地が悪いっていうか、何て言うかなあ。まあ、これなんかは親父なりの教育だったんでしょね。

あたしも「奉公に出たほうが良かったね」とよく言われたし、親父も人から「あんたの子だから我慢してるけれども、あんたの子じゃなければ、どっか行っちゃうよ」と言われてたそうです。だけど親父は「どこも行けないから、うちでやってるんだ」って(笑)。

こっちもね随分腹が立ちますよ。うちの台所に大きな柱がありましてね、その柱の根元に「げんのう」を置いてあるんですよ。「腹が立ったら柱をたたけ」と親父に言われました。そうしたら今で言うストレスの解消にもなるだろうし、「お前が腹の立っていることが回りの人間にも分かる」ってことでした。

「お店」の度量、職人の“分”

大江 今回のお正月ということもありまして、昔の職人気質とかお正月の行事とか、少しやわらかいお話を中心にお聞きしようかと思っております。

鴨下 昔は今の方には考え付かないような義理人情というものがありました。あたし達が育ってきた時代には「お店(おたな)」という世界があった。あたし達は「お店」でお仕事をさせてもらって食べてきた訳です。それが常に頭にありますから「お店」を非常に大事にしました。もちろん職人が一所懸命仕事をするだけの、「お店」には「お店」なりの度量がありま

した。

仕事がなく「お店」にいくとね、「仕事がなく来たんだな」と「お店」のほうで察してくれる。それで仕事をくれる訳です。職人はその仕事を一所懸命やる。「お店」と職人のつながりってえのが非常にありました。職人には「お世話になります」「お世話になりました」ということが常に頭にあって、何もいちいち頭を下げることはないけれども、そういう気分で仕事に努めていたと思いますね。

うちの親父は普段から人力車に乗ってましたが、「お店」の少し手前で降りて「はい、歩いて来ました」なんて顔していくんです(笑)。「それが職人なんだ」とよく言われました。「お店」もそんなことは承知しています。親父も「あんたが人力車に乗って来たのは知ってるよ」と言われたそうです。知っているんだけど「歩いて来ましたって顔して入ってくる。それがいいんだ」って。

耳のうしろ、足の裏

大江 お父さんから職人の心構えのようなものは教えられましたか。

鴨下 職人は道具さえあれば、お金が一銭もなくとも全国を回れる。それにはまず、仕事を一所懸命覚えなければいけない、そういうことをまず言われました。

職人というのは乱暴な商売、汚い商売。だから逆に職人は汚いところを「お店」あたりにみせちゃいけない。乱暴だからおとなしくしていろ、と。この二つはうるさく言われました。

例えば、顔は洗っても洗わなくてもいいんだ。耳の後ろ、ここだけ洗え。耳の後ろは汚れるからそこを洗えということです。それと足の裏。

足の裏と耳の後ろをきれいにしとけ、顔は洗ってもどうにもならない(笑)。そういう教えでした。親父は「お店」に行く時は、必ず足袋を二足持って家を出る。お座敷に上がる時に足袋を履き替えるためです。夜寝る時にもタワシで手をこすって当時あった薬みたいなものを手に塗って手袋をはめて、それから寝て



大江氏

いました。そうすると、明くる日には手の肌がきれいになっている。足の裏は軽石でこする。職人だからきれいにしてい、とやかましかったですね。

「小僧」に対しても“ももひき”と“腹がけ”をきちんとさせた。“ももひき”と“腹がけ”をきちんと着ると胡座(あぐら)はかけません。正座です。それで2時間も3時間も座らされる。絶対に足は崩さない。これはきついですよ。ですから今でもあたしは座ってる分には何時間でも平気です。胡座をかくとすぐにひっくり返っちゃう。

神様に半紙張って…

大江 「小僧」さん時代は、朝は早いうちから起こされたんでしょね。

鴨下 いや、起こされないですね。下でガタガタ始めたら、自然と目が覚めなきゃいけないんだから。起こされたことはないですよ。5時頃です。昔は早かったですよ。5時から“かまど”について火を燃やしているのが、こっちの役目なんだから。

昔は都電に早朝割引があり、普通は8銭のところ7銭で乗れた。時間になると車掌さんが「割引が終わりますよ」とどなる。その前に切符を買っちゃいます。1銭安く乗るために、早く出る訳です。7時には仕事する場所について、仕事を始める。板金屋だから叩いたりするんですが、そんな早い時間からガンガンやられたら「お店」も困るから「こんな早くから叩かれたら、うるさくてしょうがない。もう少し遅くしてくれ」(笑)。それで9時頃までは板取など音の出ないことをやってましたね。

それと「小僧」時分に、親父から「働いている人の御飯を見てこい」って一週間ぐらい職人のうちに泊まりに行かされた。あたしのうちだってロクなもん喰っていませんでしたが。職人の朝は沢庵にみそ汁。それが普通。職人は「早飯、早糞」。飯をぐずぐず喰ってんじゃない、それが職人だって。これを修業してないと、どこの「お店」いっても、どこに奉公出ても勤まらないとよく言われましたね。

大江 肉なんて食べていない。

鴨下 朝は沢庵とみそ汁で昼は塩鮭ぐらい。ひと月に肉なんかめったに食べません。せいぜい、一日、十五日に食べさせてもらえるぐらい。だからあたしの子供時分には町内に肉屋なんてありませんでしたよ。うちで今日は肉を食うとなると、神様に半紙を張っちゃってね(笑) …今じゃバカバカしいと思うけど…そうしないと食べない。

だからあたし達、「肉を食べてえなあ」と思ってましたよ。お祭りでフライ、串カツのようなものを売ってました。2銭だったと思いますが、これが喰いたく

て、喰いたくて……ね。食べると、これがおしくて、おしくて…… (笑)。

それと牛の小間切れを煮て売ってる所もありまして、これなんかも内緒で買ってました。おいしいんだ(笑)。

職人同士の礼儀

大江 職人同士の付き合いでの礼儀のようなものはありましたか。

鴨下 ある町内で仕事をする際に、その近所にブリキ屋がいるとすると、ちゃんと顔を出して「こういう訳で、お宅の町内でお仕事をやるようになりましたから、宜しく願います」と何がしかの物を持って挨拶します。挨拶しないとまずいわけですよ。逆に顔を出しておくと、道具が足りなければ「お使いなさい」となりますし、「あそこじゃ仕事できないから、うちの店使ってやりなさい」と言ってもらえる。こういう付き合いは、ものすごくうるさかった。これをしてないと、方々でお仕事ができない。

職人はね、腕がいいだけじゃ親方になれないんですよ。いろんなことを聞いて覚えて、無理だなあと思うことも聞いて、やってきた人が親方になるんですよ。人の使い方ができる、何かあった時には人のために一所懸命やる人、そういう人は親方になってますね。

親方になる人は分かります。母親はよく「この人とこの人は親方になるよ」と言っていたんですが、そう言われた人は親方になってますね。それだからといって、他の人より待遇をよくする訳ではありませんよ。本人は勤めているんだから。

人を雇うこと、雇われることについての考え方が、今はあたし達の頃とまるっきり違っちゃいましたね。昔は、この会社にお勤めしたんだから一所懸命やる、偉くなれなくてもこの会社にお勤めしたんだから一所懸命仕事をする、そういう気持ちがありました。会社の方も一所懸命やる人間だから面倒をみようとしてました。これが今はないんです。30年も40年も勤め上げようとする気もありませんし、会社も面倒をみるという感じじゃありませんよね。どっちも行き当たりばったりです。

大江 どうしてでしょうね。

鴨下 いろいろ理由はあるかもしれませんが、お金があまりにも簡単に取れるようになってしまったからかも知れませんね。昔はそんな訳にはいかなかった。あたしの子供の頃の職人の日当は、37銭5厘というのが東京での決まりでした。どこへ行っても37銭5厘。

どうして、この金額になったかというと、岩本町に大きな親方…「銅岩」さんと言ったかも知れませんが決めた。この方は頭のしっかりした親方でした。

当時は組合などありませんから、皆バラバラになっちゃうといけないと「これだけは払わなきゃいけないし、これ以上払ってもいけない」としたそうです。これを東京の人は守ってたわけですよ。

それでも中には38銭にして職人に声を掛けるところもありました、そうすると職人仲間では「あそこには行くな」ということになっちゃいます。

月に二十日働けば

大江 給料はどう払っていたのですか。

鴨下 給料は、一日、十五日。手間だからたいした金額じゃないんだけどね、この一日、十五日にお金を払えないような親方もいました。また、職人も催促しないで我慢してるんですよ(笑)。

だいたい昔の職人は、ひと月二十日働けばいいんだと、あとの十日は飲み喰いだ、そういう頭だから。お金残そうなんて気はないんだね。うちの親父も、「二十日働けばいいんだ」と言っていました。お金残す奴は職人じゃないって風潮だから、「あいつは銭残しているらしいよ」「しょうがねえ奴だなあ」となっちゃう。

うちの親父も銀行にお金を預ける時は、近所の銀行じゃなくわざわざ離れた銀行へ持って行っていた。何で近所の銀行に預けないんだって聞いたら「お前には分かんないかもしれないけど、職人ってものは、皆さんからお金をもらって食べさせてもらってる。その職人がお金を預けてるのが分かっちゃまずい」と言う。あたしなんか、分かったっていいと思うんだけど、「そうしないのが職人だ」というわけです。

大江 職人は宵越しの金は持たない。

鴨下 職人氣質にはいいところもあるんだけど、

少し考えなきゃいけないところもありましたね。大江さんのおっしゃったように、宵越しの銭は持たない、気前よくしなければいけない。

だけど気前よく出来ないのがいるんですよ(笑)。人それぞれ性格がありますからね。そうすると「あいつはしみったれた」とすぐ言う。しみったれたが当たり前だって言うんです。しみったれたじゃなければ喰えないから、本当はね。1銭のお金残すために電車早く乗ってるくらいでしょ。それでも、お金が入った時はパッと使ってね、後は1銭も持ってたらずダメだと。だから年中これ(お手上げ)ですよ。

職人氣質といっても馬鹿の見本みたいなところもありましたよ。吉原ってところは銅板工事が沢山ありまして、ブリキ屋はよく吉原に仕事に行くんですよ。仕事に吉原行ってね、うちに帰ってこないんだから。仕事しちゃう女郎屋に泊まっちゃう(笑)。それでお暇になる時、借金残る訳(笑)。お金残らないの当たり前ですよ。職人はお祭りも好きなんですよ。お祭り職人っていうのがいましてね、祭りになると絶対仕事しない。半纏着てお祭りにいっちゃう。あんまり利口じゃないね(笑)。

大江 おおらかな感じもしますけど(笑)。

鴨下 (日本橋)横山町の板地道(いたじみち)と呼ばれてた所にもあやしげな女性がいてね。親父なんか地回りみたいなことしてたから、しょっちゅう行ってたんでしょね(笑)。あたしが行くとね、その女の人に呼ばれる。何で呼ばれるかという、お菓子くれるわけ。親父がよく行くからでしょ。子供の頃は何も知らないから、お袋にね「あそこのきれいな白粉(おしろい)つけた人が、くれたよ」といっちゃう。「お前さんそんなところ行くんじゃないよ」。そんなこと言われても、一緒に引っ張っていかれるんだからしょうがないでしょ(笑)。

大江 板地道って、地名ですか。

鴨下 昔は路地みたいな所は真ん中に下水が流れてまして、その下水の上に板を渡してある所が板地道。板じゃ火事の時危ないって石をかぶせた場所もあって、そこは石地道って呼んでました。

立て膝道具屋

大江 言葉も分からなくなってますね。

鴨下 あたしの言ってることが、今の人には分からないことがあるね。使ってる言葉が違うからね。本人は威勢がよくて、昔の江戸っ子弁で気持ちいいと思ってるけど(笑)。だいたい、江戸っ子の言葉はもともと足んないわけよ。お終いまで言えばいいけど、途中で切っちゃうから。

今じゃ考えられない話もありますよ。その時は長尺がありませんから、“サブロク”の板を切ったり、銅板ならば1尺と1尺2寸の板、瓦板と言ってましたが、それを基準にして仕事してました。寸法が決まっていますから、1坪葺くの板が何枚必要かは、はぜ代をとって計算すればすぐ分かりますよ。谷なんかを別にすればね。

それが、何枚必要かで喧嘩になっちゃう(笑)。1坪13枚と言うのもいれば、15枚もある。11枚と言うものもある。いろんな人がいるんですよ。「あたしゃ15枚じゃなきゃやらないよ」とはっきり言うんですよ。片方の人が「13枚」と言ったら、「それは間違ってる」って、平気です。多く言う人は、2枚分儲けようとしていたんでしょうね。そんなことも分かっていて「お店」は仕事を出してくれた。「お店」のほうが一段上ですよ。

道具屋でも似たような話がありましてね、道具屋に何人かで行って、柳刃なんかの細かい物を懐に入れて来ちゃう奴がいる(笑)。道具屋の方は知ってるんですよ、五、六人で来ると「何か持ってくな」ってことで、それを計算に入れている。

大江 顔を見て鋏の値段が変わっちゃう(笑)。

鴨下 そういうこと(笑)。佐竹(台東区)に「立て膝道具屋」って評判になった道具屋さんがありました。

大江 なんか特別な物売ってたんですか。

鴨下 特別のものなんかありませんよ。昔は商人は立って物売っちゃいかんと言われてまして、店先ではちゃんと座ってました。ところがそのカミサンは、座る時に片膝をちょっと立てて座るんだそうです。それを見たくて買いたくもないものを買いに行く奴がいた(笑)。

大江 チラッと見せていい値段で売ってしまう(笑)。

鴨下 目は膝小僧のほうへいつてるでしょ。ロクにもの見ないで「これでいいよ」って、買ってきちゃう(笑)。

昔はさ、荷車に轆かれた奴がいたんだから。よっぽど間抜けなんですよ。荷車なんかには、自分から足でも突っ込まなきゃ轆かれませんか。昔の人ってえのは、今考える以上にボーッとしてたんだね。

荷車から拍子木

大江 その頃の道具はどんなものでしたか。

鴨下 鋏が三丁。えぐり、柳、まとも(直刃)の三つ。それから“げんのう”一金槌、折り台と拍子木に刀刃(かたなば)。それと「駒の爪」「影たがね」とか、その程度です。駒の爪とかは少し仕事の出来る人が使う。銀杏葉(いちようば)も同じ。

大江 銀杏葉はうちの若いもんなんか「何に使うの？」という感じ。

鴨下 道具はやはり「久光」さんが何と言っても一番でしたね。値段も他より三倍ぐらいしましたし、注文



えぐり



柳



まとも(直刃)

しても3カ月ぐらいしないと手に入りませんでした。

大江 うちの親父も「久光」の柳刃なんか大事にしました。「これはものが違うからさわるんじゃない」って。

鴨下 昔の道具屋さんは、刀鍛冶か農機具屋さんの出の方が多かったですね。今は道具屋さんがありがたいことに色々と考えてくれますが、昔は自分でこさえてました。拍子木は荷車の車の軸の木をもらってきて、それを削って作ってました。木が枯れ切ってますからいいんですよ。それを知ってる人は、わざわざ車屋さんに頼んで、取って置いてもらってました。



刀刃(かたなば)



たがね

大江 拍子木も、きれいにしておくためにたえず削っておく。そうやって細くなった物は銅板の時に使う。新しい拍子木はバンバンやる時に使う。拍子木だって使い分けしてましたよね。

ひびが入ってくると刀刃で割って、金槌の柄にする。ちゃんと最後まで道具が生きている。自分で削って、自分の手に合う金槌の柄を作る。人によってわざと内側に曲げたり、外側に反らしたりと、皆違ってましたね。

ここは“風道”だから

鴨下 そうね。それと昔の職人は金属の伸縮なんて頭に入っていない。これは以前にもお話しましたが、



駒の爪



銀杏葉(いちようば)



うちの親父なんかも戸袋に銅板張ってシワが寄ると「ちゃんと古い材料使ってくれないと困る」って大工に文句言っていました。木が縮むってわけです。言われた方も金物が伸びるなんて知らない。

大江 “はぜ”で伸縮を吸収しているという考えはない。

鴨下 ないんだ。だから11枚で屋根葺けるなんていうのは、だいたい“はぜ”を細く仕上げてる。伸縮ってこと知らないから、伸びた時に“はぜ”がおっぱずれちゃう。それでも「木が悪いんだ」。なんのことはない、てめえが悪いんですよ(笑)。だけど、それで通ったんですね。

だから、風で屋根が剥がされても「風の通る所は、剥がれるんだからしょうがない」で済ましちゃう。屋根に上がってみると確かに道みたいに剥がれている。それを見て「こうなんだから、いくら剥がれないようにしろったって無理だ」。雨が漏れば「こんな大降りなんだから、漏るのは当たり前」。

大江 いい時代ですね(笑)。

鴨下 自分が悪いなんて言わないんだから(笑)。

大江 昔は風道(かざみち)だからしょうがないと、直してまたお金をもらえた？

鴨下 そうそう。それから「風で剥がされないと、屋根そっくり持って行かれちゃいますよ」という言い方

していました。ただ、これに似たことは柳橋であった。柳橋は大川端…隅田川の縁…だから、剥がれちゃいけないってことで、いろんな事して一所懸命留めてやった。そしたら、垂木から上そっくり屋根もっていかれちゃった(笑)。大工が「ブリキ屋さん、あんまり丈夫にするから屋根ごと持ってかれちゃったよ。今度やる時には、俺たち困るからあんまり丈夫にされちゃこまるよ」って言ってやがったんだけどさ(笑)。お互いそんな下らないこと言って通っていた時代でしたね。

大江 神社などの屋根を葺く時に図面なんかあったんですか。大工さんが板図を書いて、後はブリキ屋さんまかせ？

鴨下 いや。図面どおりに写してくるんです。棟梁の頭には出来上がった姿が入ってますから、“みの甲”などについても「こうやれ」と指示がある。その指示があっても、神社なんかの屋根になると、出来るブリキ屋はそう多くない。指示通りにやっても、棟梁の頭に入っているものと違うことが多いから、出来上がった後に「ああだ、こうだ」ってなっちゃう。図面と立体化したものでは見た目が違うからね。あたしは、全部紙に張り付けて棟梁に見せてました。「棟梁から聞いた話では、足はこうなります」とか見せる。そうすると「もう少しあげてくれ」とか言われる。

大江 昔の棟梁はブリキ屋のことも分かった。

鴨下 そうです。こっちも出来上がった後にいろいろ言われても困るから、「今のうちに言って下さい」って。棟梁も「そう言ってくれるとありがたい」って感じでした。

板金は“ハイカラ”で嫌

大江 お父さんの頃はブリキ屋という名前で仕事をしていたんですか。

鴨下 親父は板金なんてのは、ハイカラな名前で嫌だって言っていました。ブリキ屋はブリキ屋でいいんだって。板金という言葉が出てきたのは(関東大)震

災の後くらいからでしょうかね。その前は、銅鉛屋(どうこや)、屋根屋ね。ブリキ屋より銅鉛屋の方が古い。横浜あたりでは、いまだに銅鉛屋。

屋根屋っていうのは、トントン葺き。昔は上に何を張ろうが、瓦だろうが銅板だろうが下はトントン葺き。トントン葺きってえのはたいしたもので、これがあるから雨漏らないんです。下葺きで持たせるようにしなかったら、屋根は漏るもんだと思ってかからないとダメ。それと勾配。昔は四寸勾配以下はダメだと言ってました。

大江 結構急ですね。足下はどうしていたんですか。

鴨下 足は裸足足袋(はだしたび)。時々上からロープ引っ張ってね。それでも普通の職人は、四寸五分が限度ね。五寸というと身の軽いもんじゃないとね。昔は随分下に落ちて怪我した人がいたんです。

「腰払い」という足場を屋根の周囲に回さなければいけない。1本の丸太ですが、これがあれば、上から落ちてきても掴まれる。だけど、これをやらないから落っこっちゃう。ロープもつけない。「屋根屋がお猿さんみたいに縄付けて歩くななんてみっともない」って。すぐそういうことを言うんだから。紐なんか付けて屋根上がってると「あの野郎どうしようもねえ」とか「屋根屋じゃねえ」なんてね。

今の人もやりたがらないでしょ。でも、そうじゃないんですよ。屋根に上がるんだから、まず自分が気をつける。何かあった時には自分が困るんだから。昔の人はね、周りに誰かいると、ついその気になっちゃって(笑)、飛んで、落っこっちゃう。あたしなんかもね、生子(なまこ)：波板屋根の母屋から母屋にパッ、パッて飛んでたもん。四尺くらい間が開いてましたね。

大江 怖くない？



鴨下 それは怖いけどさ。身が軽いとこ見せよって(笑)。生子屋根の母屋は動きますから、踏み外して落っこっちゃった人いますよ。

昔も後継者不足

大江 昔は今と違ってブリキ屋のなり手は多かったんですよ。

鴨下 いや、いない。

大江 どうしてですか。

鴨下 格好が悪い。だいたいブリキ屋の“なり”ってのは、コールタールで汚れた“ももひき”はいて、背中に道具をしょって、手に七輪ぶらさげてでしょ。ブリキ屋になる「小僧」なんていないもん。はっきり言って。

大江 地方から丁稚で来ることもありませんでしたか。

鴨下 来ましたよ。ただ、それは跡取り。「東京で修

業してこい」って出された人間だけ。だから、修業が終わるとうちに帰っちゃう。

「親がやってるから、しょうがないからやるか」ってくらいですよ。奉公に来るといえるのはいませんよ。修業に来た人間は、5年くらいで全部帰っちゃう。

大江 年明けは5年ですか。

鴨下 3年です。3年で帰る人もいましたが、5年はいましたね。3年我慢出来れば立派ですよ。3年我慢出来ないで、何だかんだで途中で帰っちゃうのがいましたね。

大江 昔も後継者不足というのは、意外な感じがしますね。

鴨下 親父がブリキ屋やってても「ブリキ屋なんかないたくない」って奴がいっぱいいた。ブリキ屋の格好見て下さいよ。あれじゃブリキ屋になろうなんて気がしませんよ(笑)。

気分がよければ

大江 お正月はどう過ごしていたんですか。七日ぐらいまでは休んでたんですか。

鴨下 三日間だけです。休みは、それとお盆の十五日、十六日だけ。暮れは三十一日まで仕事。暮れになると忙しいですよ。三日か四日は「お店」に手伝いに行かなきゃいけない。お金を頂きに行くんじゃないですよ。普段お世話になってるから行くんです。それでも「お店」からは、暮れにはご祝儀と半纏を頂いた。こっちはつまらないバケツか何か持って行ってね(笑)。

二日は仕事始めです。だいたい雨樋をこさえる。丸縦樋ね。これがまた競争なんですよ(笑)。十枚切って、十枚丸めてだいたい一時間。これを三本、二本、一

本と重ねて、半紙と紅白の熨斗をかけて納めてから、飲み喰いですね。職人もこの時祝儀を貰う。

材料屋さんも二日の日が初荷です。暮れのうちに全部注文を取っておいて、二日に荷車に積んで、おおぜいで「おめでとうございます」などと言いながらお客さんの所を回ってました。

大江 人の作った縦樋は使えませんよね。

鴨下 そうそう。競争してこさえても自分ののは合う。人を持ってくると合わないんですよ。“はぜ”の太さが違うから。

大江 鴨下さんは今年で九十三歳になりますが、お元気ですね。

鴨下 この頃は、近所の人が年寄り扱いしてさ。あたしが外に出てくとね、どこからか人が出て来て、いきなりひとの肩に手を掛けて「鴨下さん気をつけて下さいよ」。

気をつけて下さいって言うてる奴が腰曲がってんだもん(笑)。こっちの方がよっぽどしっかりしてるのにさ(笑)。

年取るといろんな奴がいますよ。「年寄りを大事にするルールがある」なんて言う奴もいる。ルールがどうか、こうとか言っても自転車とぶつかって怪我するのはこっちなんだから。例えば、一步譲って自転車通してやると、乗ってる人は「ああ、よけてくれたんだ」って、気分がいい。気分がいいってことは事故おこさない。

こんなこと人に言くとね、「だけど…」なんて言うてる。“だけどじゃない”んです。年寄りは一歩譲ること、それから人に頭を下げること。頭を下げてれば、どうってことないんだから。年寄り世話になってるんだってことを頭においておかなきゃ。

大江 今日は楽しいお話をありがとうございました。